

## 和歌山県印南町における歴史津波資料を活用した防災活動

### Report of of disaster prevention activities utilized historical records about tsunami in Inami, Wakayama

蝦名 裕一・佐藤 翔輔\*

#### 1. はじめに

近年、全国的に災害が多発する中、災害発生地域における過去の災害が着目される傾向にある。特に、東日本大震災を契機として、近代の気象観測以前に発生した歴史災害に対して注目が集まっている。むろん、従来より我が国における歴史災害については専門家による研究・分析が膨大に蓄積されている。ここでは古文書に記された災害の実態や先人達の教訓、石碑・慰霊碑や地域に伝わる伝承に基づいた歴史災害の解明が多数おこなわれている。

これらの歴史災害の研究・分析を今日の防災対策の中で効果的に活用するためには、専門家のみではなく、歴史災害の情報・教訓を一般人の日常生活の中で認識・継承していく必要がある。しかし、古文書の解読や歴史災害の分は専門的知識を必要とする場合が多く、一般住民の間に周知するには課題が大きいといえる。また、東日本大震災の被災地となった三陸地方では明治三陸津波や昭和三陸津波の記念碑が多数存在しており、実際にこれらの教訓が活かされて地域住民の避難が速やかに行われた地域があった一方で、石碑の劣化や難解な文章ゆえに地域住民にその存在を忘れられている例も多くみられた。すなわち、歴史災害の情報・教訓を防災に活用するためには、現代の日常生活の中でより受容しやすい形で再生産する必要がある。

本稿では、和歌山県日高郡印南町において実践されている、南海トラフを震源とする巨

大地震・津波に備えた日常的な防災への取り組みについて紹介したい。印南町は、宝永 4 年 (1707) の宝永地震、安政元年 (1854) の安政南海地震、昭和 21 年 (1946) の昭和南海地震など、南海トラフを震源とする地震で発生した津波によって何度も被害を受けており、宝永地震以来の歴史津波に関連する古文書や石碑など歴史資料が多数存在している地域である。これらの歴史津波の情報が、今日の印南町における防災活動の中でどのように活用されているかについて紹介していきたい。

#### 2. 印南町に残る歴史津波の記録

印南町は和歌山県中部に位置し、南西部は紀伊水道の印南湾に面した人口約 8,500 人の町である。印南川の河口部に位置する印南浦は、かつて南海トラフを震源とする地震によって発生した津波で幾度も被害を受けてきた歴史がある。同時に、この地域には宝永地震以来の歴史津波に関連する各種の歴史資料が多数存在している。

宝永 4 年 10 月 4 日 (1707 年 10 月 28 日) に発生した宝永地震の際、印南浦は津波によって多数の死者を出す被害を受けた。浄土宗印定寺には、宝永津波から 13 回忌に当たる享保 4 年 (1719) に作成された「津浪溺死霊名合同位牌」が存在し、表面には津波で死亡した 162 人の名が記され、裏面には当時の印定寺住職によって津波の様子が記されている。これによると、印南浦では宝永地震発生の当日正午から午後 1 時にかけて大地震が数度にわたり発生して山崩れなどがおこり、さらに午後 1 時から 2 時にかけて山のような津

\*東北大学災害科学国際研究所

波が集落に流れ込み、家屋や人々を押し流したという。また、印定寺境内には位牌と同時期に建立された「高波溺死靈魂之墓碑」と題された高さ約 60cm の石碑が存在し、左側面には合同位牌とほぼ同内容の津波発生時の様子が漢文で記されるとともに、背面には津波が「札の辻」にて「六尺」(約 1.8m)、「印定寺門柱」で「二尺」(約 60cm)であった事が記されている。【写真 1】

宝永地震津波から約 150 年後の安政元年 11 月 5 日 (1854 年 12 月 24 日) に発生した安政南海地震の際も印南浦に津波が侵入し、家屋流失の被害が出たが、この時には住民に犠牲者はなかった。この津波の様子について、印南町本郷にかつて存在していた旧家「かめや」の蔵の板壁に、当時の当主・弥兵衛が書き記した墨書が存在している。その記述によれば、11 月 4 日に発生した津波によって印南浦の坂本や本郷では家屋が全流失し、住民達は背後の東宮神社が位置する高台まで逃げたという。また、「かめや」では本宅や石垣が流失、板壁が存在する蔵も棟まで津波に浸水したという。続けてこの記述では、6 月 8 日にも大地震と「すゞ波」があったにも関わらず油断していたため全てを流してしまったとし、こうした災害は「百八拾載めでくると之事」、つまり 180 年に 1 度来るものであると述べ、地震が発生した時には何もかも捨てて高台に避難するべきとの教訓が記されている。【写真 2】

「かめや」の蔵は戦後まもなく取り壊され

たが、この教訓が記された 11 枚の杉板部分については、その重要性を指摘した地元の郷土史研究者や住民の手によって保管され、現在は印南小学校横のいなみっこ交流センターに所蔵されている。

### 3. 印南中学校における災害研究と印南町における防災活動

「防災わかやま」に掲載されている和歌山県の想定では、印南町で南海トラフ巨大地震が発生した場合に想定される津波高は最大で 15m、東海・東南海・南海 3 連動地震の場合は最大 7m とされている。こうした将来の地震・津波災害に備え、現在印南町では積極的な防災活動が展開されている。

印南町での取り組みで特に着目されるのが、学校教育の現場における子ども達を中心とした災害研究・防災活動の実践である。印南町立印南中学校では、阪本尚生教諭が中心となり、歴史資料を活用して印南地域における津波研究とそれに基づいた防災啓発活動を展開している。印南中学校では、2005 年度に 3 年生の選択理科において独自の津波研究を開始し、印南湾の地形模型による津波の動きの再現実験や、和歌山工業専門学校と連携して印南湾における津波来襲のシミュレーションを実施した。

2010 年度からは 3 年生の総合的な学習の時間において地域住民への津波防災啓発活動を主眼とする活動へ移行し、それまでの研究



【写真 1】「高波溺死靈魂之墓碑」



【写真 2】「かめや」壁書

成果をまとめた講演会、地域住民への地震・津波に対する認識のアンケート調査を実施した。また、安政津波の際に津波犠牲者が無かったという歴史的な事実をもとにして、小学生を対象とした紙芝居「安政印南のキセキ」を作成し、その内容を動画化してインターネット上に公開している。

さらに、2015年度には前述のかめや板壁の墨書のくずし字解読作業を実施、中学生自身がくずし字事典を引きながら解読し、専門的知識を要する部分については和歌山県立文書館の学芸員の協力を得て、全文約250文字を解読し、意識文を作成した。この作業の過程では、従来の解読文にあった誤りを修正するなど新たな研究成果も得られている。

これらの印南中学校の活動については、兵庫県・毎日新聞などが主催する1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」で3回にわたり奨励賞を受賞するほか、2015年度には継続的に実施された取り組みが評価され「継続こそ力賞」を受賞するなど、全国的にも先進的な防災教育の取り組みとして評価されている。

さらに印南中学校生徒による研究成果は、2012年度に御坊中央ライオンズクラブの資金援助を得て防災啓発冊子を作成、さらに2014年度には印南町の防災「いなみっ子」未来プロジェクトを活用し防災啓発リーフレット「印南の津波災害」としてまとめられ、印南中学校区全世帯に配布されている。

こうした津波研究の成果は印南町当局も積極的に防災活動に取り入れている。2014年2月には、印定寺門前に「宝永南海地震津波記念碑に学ぶ」として防災教訓伝承板が設置され、宝永地震津波の被害や合同位牌・墓碑の内容を写真とともに掲載することで、宝永津波の教訓が日常的に住民の目に触れるようになっていく。【写真3】

さらに、印南町では歴史資料の活用のみならず、実際の防災活動として次のようなことが実施されている。印南小学校の校舎は海拔2.8メートルの位置に建設されているが、南海トラフを震源とする地震の発生に備え、校舎背後に位置する海拔20メートルを超える

上野山までの避難階段が設置されている。【写真4】

また、津波災害の発生に備えて印南小学校では全児童の椅子に救命胴衣が備え付けられている。【写真5】この救命胴衣について、児童には災害発生時に「必ず着ること」ではなく、「とりあえず持って逃げる」という二次的な使い方を指導している。その理由は、「子供達は教えたことを守ろうとする」ため、



【写真3】防災教訓伝承板



【写真4】印南小学校から高台への避難階段



【写真5】児童に配布されている救命胴衣

災害時に救命胴衣の着衣に時間がかかり、適切に避難できなくなる可能性があるためであり、小学生の発達状況に応じた対応をしている

#### 4. むすび

ここまで印南町における歴史津波の資料の存在と、これを活用した印南中学校における災害研究、印南町の防災活動について述べてきた。

印定寺の合同位牌・墓碑に代表される印南町の歴史資料は、宝永地震津波の状況を伝える歴史資料としても極めて良質なものであるが、これらの位牌や石碑は現状において直接地域住民の目に触れる機会は少ない。しかし、これらの歴史資料を学校教育の場における教材として積極的に活用することにより、生徒・児童が身近な地域における津波災害の特徴、地域の自然・歴史を理解する教育活動として機能しており、災害教訓の継続的な伝承という意味では極めて効果的といえよう。

また、中学生の手によって作成された研究成果によって、難解な古文書が地域住民にとって受け容れられ易い形となって可視化されているのも、地域全体の防災意識向上の一助となっているといえる。さらに、印南中学校における研究成果を印南町が町の事業として取り組む防災活動に組み込み、防災教訓伝承板

を設置するなど、教育と行政が効果的に連携した取り組みとなっている。

印南町における歴史資料を活用した津波防災の取り組みは、全国的にも先進的な事例であるとともに、その最も大きな特徴は地域の災害を学ぶ子どもと防災を事業として実践する大人の連携という、世代間の効果的な連携にあると言えよう。

謝辞：本研究の調査においては、印南中学校学習支援員阪本尚生氏、印南小学校校長平尾潔司氏にご教示をいただきました。本研究の一部は、文部科学省受託事業「南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト」より助成をいただきました。ここに記して、謝意を表します。

#### 参考文献

- 阪本尚生, 2013, 来たるべき南海トラフ巨大地震に備えて, 災害教訓の継承に関する専門調査報告書—1707 宝永地震, 内閣府, 135-137p.
- 東京大学地震研究所編, 1994, 新修日本地震史料続補遺, 780p.
- ウェブサイト「防災わかやま」<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/011400/>
- You tube 動画「安政印南のキセキ」<https://www.youtube.com/watch?v=71XcknKLuTY>